



クラスの力

一年時にやった『徒然草』を引用しよう。

＊

ある人、弓射ることを習ふに、諸矢をたばさみて的に向ふ。師の曰わく、「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて、初めの矢になほざりの心あり。毎度ただ後の矢なく、この一矢に定まるべしと思へ」と言ふ。わづかに二つの矢、師の前にて、一つをおろかにせんと思はんや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ、万事にわたるべし。

道を学する人、夕には朝あらんことを思ひ、朝には夕あらんことを思ひて、重ねてねんごろに修せんことを期す。況んや、一刹那の中において、懈怠の心あることを知らんや。何ぞ、ただ今の一念において、ただちにすることの甚だかたき。(第九二段)

＊

途中に登場する「なほざり」、「おろかに」は超重要語であるが、意味は大丈夫？

さて、この話をこの時期になって読み返してみると、なかなか含蓄に富むことが実感されるのではなかろうか。第二段落では、「夜には明日があると考え、朝には夜になったら真剣にやろうと考えて、思い立ったその瞬間に（真剣に）実行することは難しい」ということが指摘されている。自分の勉強ぶりを振り返ってみると、同じような状況に陥っていないだろうか。

席替えの際、「最後だから…」という思いもあったようだが、その中にすでに「懈怠の心＝怠けようとする気持ち」が含まれているのである。確かに席替えは最後かも知れないが、勉強は最後ではないのだし、むしろこれ

からが本番とも言うべき時期である。その時、楽しく授業を受けたいなどというのは「懈怠の心」といっても過言ではない。最後の時期だからこそ、規律正しく、きちっとこなすべきことをこなさなければならないのである。15年の経験から、担任（＝師？）はそのことをよ〜く知っているのである。

例えば、これから寒くなるが、遅刻しないようにすることが先ず大切だ。一時間目の授業が落ちついた雰囲気できっちりスタートできれば、一日の授業や生活にもリズムが生じて充実する。

また、政経が受験で必要のない人にとっては、その時間がムダな時間に思えるかも知れないが、必修科目であることや最後の考査のことを考えると、授業の時間中に「修せんことを期す」気持ちで授業に臨むことが大切だろう。そうしておけば、考査前の学習時間を節約できるわけだし、小論文が待ち構えている人にとっては、文系理系を問わず、政経の分野がそのテーマと密接に関係していることは常識である。落ち着いた内職、つまり「（後になって）重ねて修せんことを期す」ことをしないと身につかないような勉強をしても単に時間のムダである。

真剣な態度で授業をうけ、先生方の最高のパフォーマンスを引き出して、毎日の教室を活気あるものにしていけば、それが結局は全員のやる気を維持し高めて、進路開拓へと結びついてゆくのである。そういうクラスの力が、今、求められているのだ。行事で見せた力を、今度はぜひ学習の面で発揮して、全員で真剣な学習の雰囲気作りをしてほしい。